

# 再視聴室・図書室の利用および学習相談の状況 (神奈川学習センターの場合)

宮 代 彰 一

《要旨》学習センター機能のいくつかにつき、発足の期間の状況を、神奈川学習センターでふりかえってみた。再視聴室や図書室の利用は、面接授業、通信指導、認定試験などの周期にあって増減し、学生の勉強の動態を物語る。この期間、未完工で手狭であったけれども、これらはよく利用されていた。学習相談は、もちろん学習にからむ話であっても、教務事務的なことや、まだ一般初歩的なことが多い。実際に相談にきた学生は実に喜んで帰るが、一方、相談希望の人の数は多くない。いづれにしても、初期段階であるから、当分は実情の把握につとめるべきであろう。

## 1. はじめに

昭和60年4月の放送大学開講以来、約半年が経過した。この初期の期間における、学習センターの機能のいくつかの状況、すなわち放送授業の再視聴設備や図書室の利用状況、また学習相談の実情などについて紹介をする。たゞし、本学にある6ヶ所の学習センター全部について述べることは筆者の立場でもないし、もちろん不可能なことであるから、筆者の属する神奈川学習センターの場合に限りたい。したがって、全学習センターに共通なこともあろうが、こゝでの紹介すべてを一般論とはとらないでいたゞきたい。

しかも、神奈川学習センターは、事情により、この半年間は未完工であった。すなわち昭和60年4月の開所時には、第一期計画2,400㎡のうちの約40%（～1,000㎡）の部分完成であり、この報告を執筆している11月に、残余を含めて完工した。それで本報告に述べる内容は、手狭な状況……再視聴室、図書室は臨時の小部屋……での話なのである。

もうひとつ、予め述べておくべきことは学生数である。当センターでは、この期間での登録学生の総数は、概数で2,400余名であった。これだけの学生の

学習センターの利用……利用という言葉は適切でないかも知れないが……のピークは、何と云っても単位認定試験時であり、科目によっては受験者が多くて、試験場として学外に部屋を借りねばならなかった。ついで面接授業期間である。これを受講にくる学生数は、週日は100名前後、週末がその2～4倍程度であった。どちらかという、1学期に対して、2学期の方が平準化した傾向があった。以上のことを前提として以下の記述を読んでいただきたい。

## 2. 再視聴室の利用

### 神奈川学習センターの施設

放送大学の特徴である放送講義の再視聴施設である。当センターでの再視聴機器のセット台数は、このほど（60年11月）に予定の40台（図1）になるまでは、僅か12台で運営されてきた。ただし、テープライブラリ（図2）には、表1に示したように、始めから他センターと同様に必要なテープがすべて準備されていた。



図1. 再視聴室：神奈川学習センターでは60年11月から施設が拡張され、12台から40台になった。

図2 再視聴用テープライブラリ

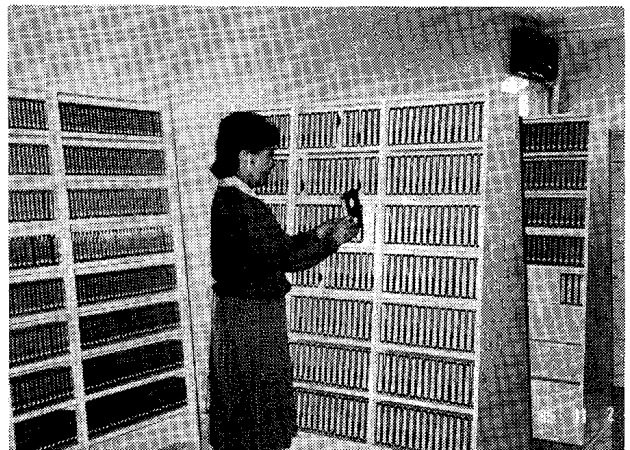


表1. 再視聴テープ数 (60年10月 神奈川学習センター)

<ビデオテープ>		
放送講義 (2単位)	45科目	675本
”	(3単位) 1科目	15”
”	(4単位) 7科目	210”
その他		12”
	計	912本
<オーディオテープ>		
放送講義 (2単位)	42科目	630本
”	(4単位) 10科目	300”
	計	930本
	総計	1,842本

### 利用者の経時変化

まず図3にこの半年間の利用者数の経時的変化を示した。この図は各週（火曜→日曜）ごとに、一日あたりの平均利用者数を算出したものである。もちろん、週内の非実動日（祝祭日など）は除去して計算してある。また、図中で最大数というのは、その週内の一日で、最も多かった利用者の数である。これを見ると、分ってみれば至極、当り前の結論がえられる。すなわち、

- (1) 面接授業が始まると、次第に利用者が増えてくる。
- (2) 面接授業期間の半ばをピークにして下ってくる。これは通信指導問題解答の提出期限との関係がありそうで、勉強の節目になっているためかも知れない。
- (3) 面接授業が終っても、再視聴のためにくる人……余り多くはないが……が続く。そして単位認定試験に向って増加する。
- (4) 単位認定試験期間は、受験で来学する人が、最後の仕上げか、待ち時間の利用か分らぬが、とにかく利用が多い。
- (5) 5月の連休は少し減少する。またとくに第2学期の開始された8月の前半、すなわち盛夏の利用者は非常に少ない。

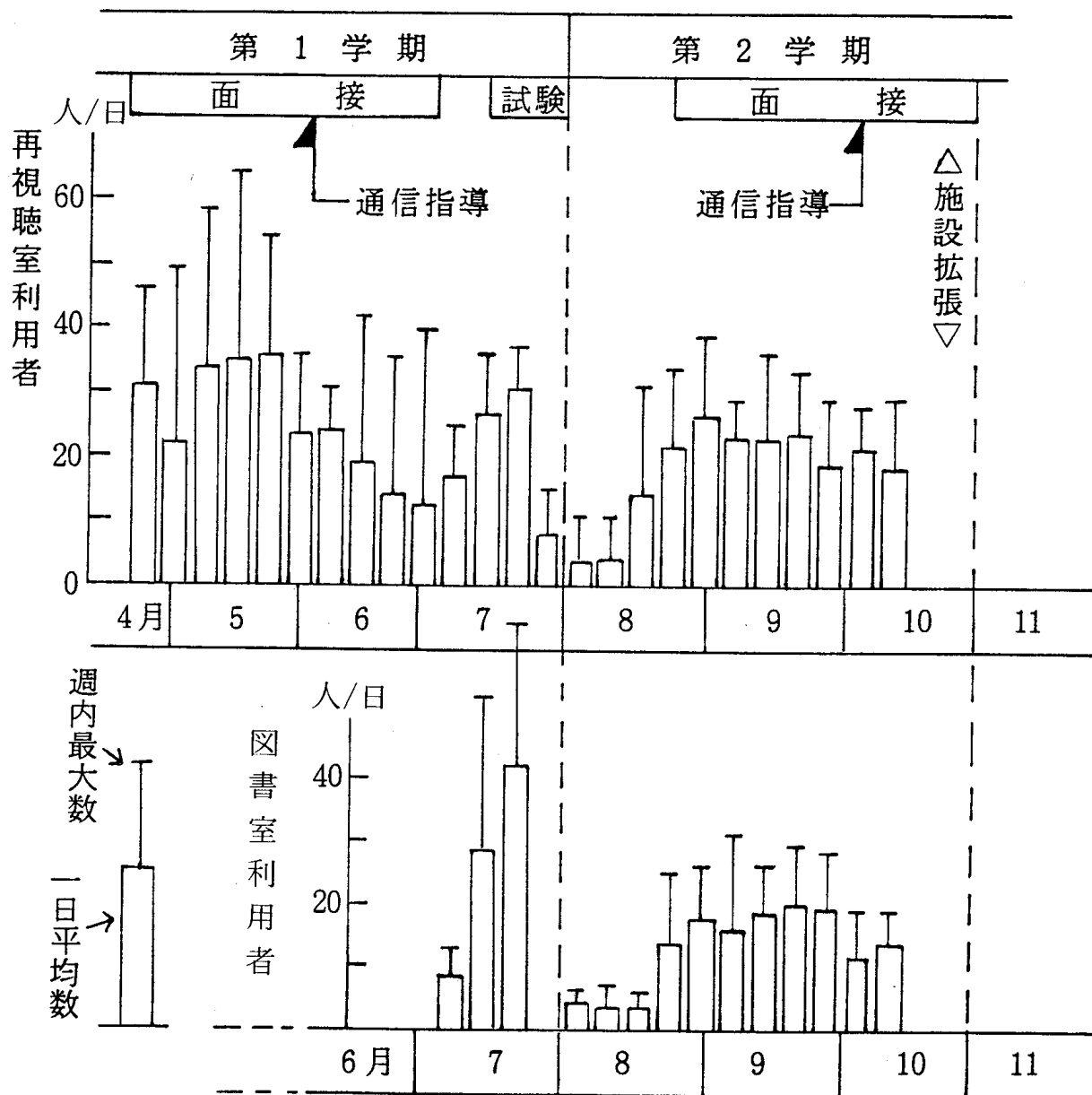


図3 再視聴室（上図）と図書室（下図）の利用者のうごき  
 神奈川学習センターでの週ごとの一日あたりの平均利用  
 者数、および、各週における最大利用者数  
 （10月後半は閉室）

## 面接授業期間中の利用

つぎに面接授業期間での利用についてぬき出してみよう。図4に示したように、曜日によってばらつきがある。これについては、

- (6) 利用者の数は面接授業で来学する人数にかなり正確に比例している。大ざっぱにみて、延べ人数では来学者の2～3割が利用していることになる。
- (7) しかし、来学者がある程度以上に多くなると、(たとえば第1学期の土曜日)利用の割合は下がる。混雑であきらめるためであろう。
- (8) 日曜日は思ったほどには利用の割合が高くない。受講者の多かった第1学期の土曜日の科目が、第2学期には日曜日に入れ換ったにも拘らず、その日曜日の利用者の数はそれほどには増えていないのである。これは土曜日の方が勉強に振りあてる気持ちになり易いためとでもいうのであろうか？

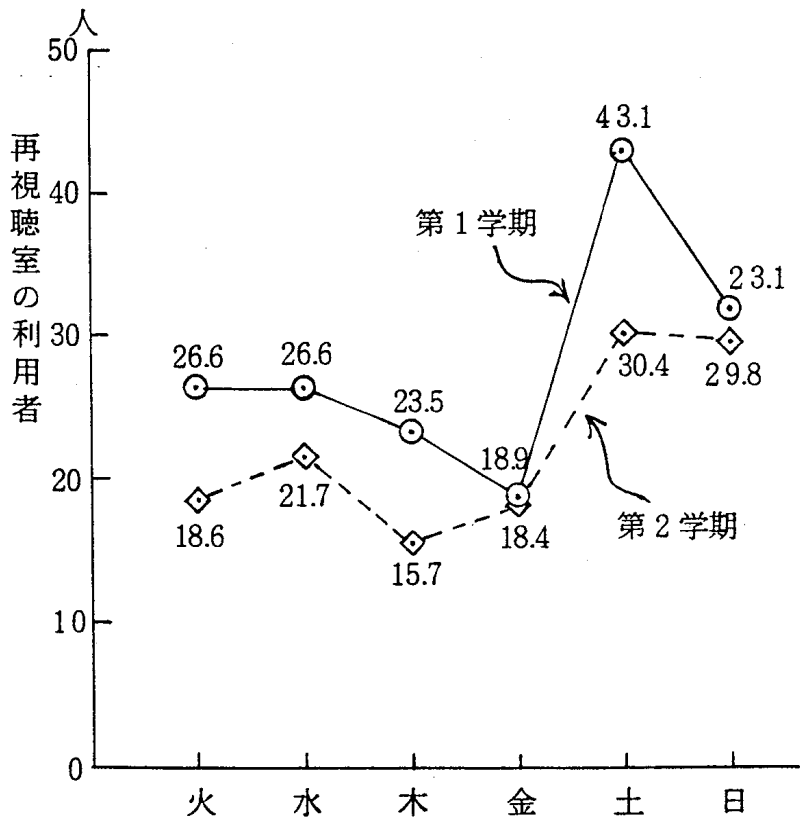


図4. 曜日による再視聴室利用者数  
(面接授業期間中)

## テープ利用の傾向

利用されるテープについては図5のようなデータがえられた。これは各月ごとの統計で、開室日、一日あたりの平均利用テープ本数である。全体の推移は図1でみたのと同じ傾向であるのは当然である。

一方オーディオテープの利用が少しずつ増えてきているようにみられる。これについての理由づけは確かではない。ひとつの推察であるが、ビデオについては、日がたつにつれて、学生達は録画装置を入手し、その使い方になれて、家庭で思うように録画できるようになった。ところがカセットテープレコーダの方は沢山普及しているにも拘らず、一般に予約機能を持っていないものが多い。したがって、学習センターでラジオ授業の再視聴の必要性が相対的に多く残ってきたのではないか……というのである。

なお、一人あたりの利用テープ本数については、この期間中、混み合った場合、連続貸し出しを遠慮させたので、2～3本程度であった。11月の設備拡張後は、順番待ちが解消し、ずっとその本数は増えている。

どういう科目（テレビ科目）が多く再視聴されているかをみると、やはり受講登録者数で先頭にある英語Ⅰや心理学概論Ⅰが多い。それにつづき、10位までをとってみると、いずれも1学期の登録者数が1,000人を越えるものばかりである。10位までの中では、1つを除いては基本、基礎科目、そして語学（英語Ⅰ）であるのは当然かも知れない。なお同じ10科目で、面接授業のあるのは6科目、他が4科目であるから面接授業の有無はさほど関係があるとは思われない。

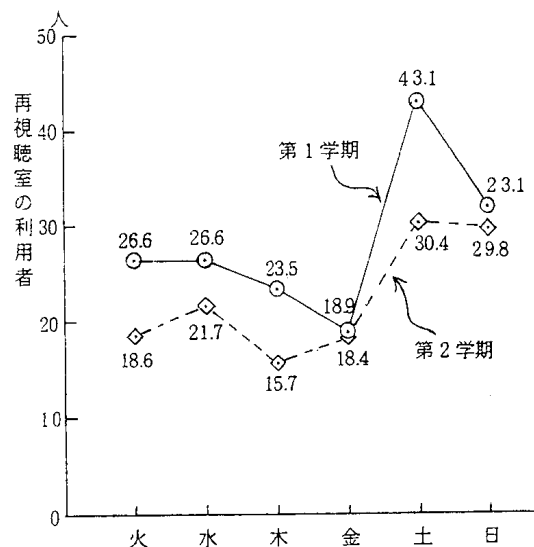


図5 再視聴室で利用されたテープ本数

各月ごとに開室日数で一日平均数を算出。テープはオーディオ、ビデオの合計。最多というのはその月内の一日で利用されたテープの最多値。

放送講義のテープ以外に、試みとして、第1学期に放送された質問コーナーを録画（テレビ分だけだったが）して再視聴室においたところ、相当な要求があった。ある機会に10数名の学生にきいてみたら、質問コーナーを視た人はたった一人であった。折角のこの番組を見落しているのを補ってあげられたのでよかったのだろう。

### 3. 図書室の利用

#### 備えつけ図書

学習に放送のような新しいメディアが使われるようになって、印刷物学習の重要性が低下するはずはない。図書室はやはり学習センターの心臓である。たゞし大学本部の図書館とは多少、趣きを異にし、学生むけの自習用参考図書が中心となっている。すなわち、各分野の辞書、辞典、総記や代表的な図書などの基本的なもの、そしてそれぞれの科目で執筆講師が学生に指示、あるいは例示した、いわゆる指定図書をまず集めている。

6学習センターを通じて、本年（昭和60年）春の開所時には約8,000冊の単行本、および約60タイトルの各種定期刊行雑誌を準備した。今年度末（60年度末）までには約16,000冊、そしてすぐに20,000冊を越えるようになると期待している。

#### 神奈川学習センターでの利用状況

前記のように、当センターでは、この11月に完工して、図6のように広い図書施設になった。しかし、それまでの半年間は仮の小部屋のため、図書は前記の半分以下の約3,500冊、椅子の数も20脚程度であり、学生の利用も自ずと制限されてしまっていた。

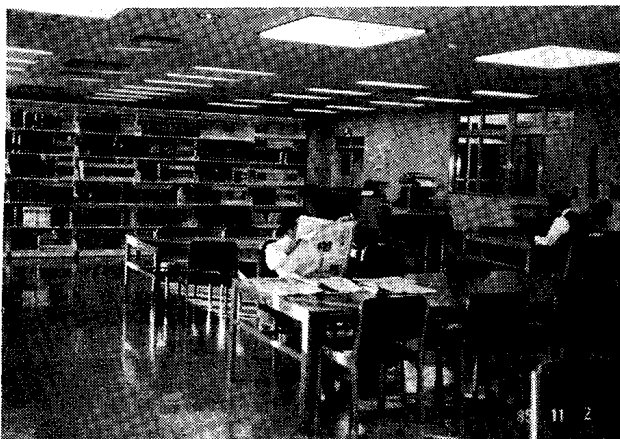


図6. 図書室：神奈川学習センター

60年11月にはこのように拡張完工した。

その条件の中での利用の実体の一部を図3のなかに示した。図書室の利用者と再視聴室利用者の区別をつけえなかった初期のデータはない。いずれにしてもその利用の動きは、前出の再視聴設備の利用とほぼ平行しているのは確かである。なお、7月の単位認定試験期間中の突出は、待ち時間と、冷房に関する。

図書の貸し出しは、コンピュータ化の完成をまって、9月3日から開始され、早速に9月中には158人、225冊が貸し出され、喜ばれている。図書のコピーサービス（1枚40円の有料）は、やはり通信指導問題解答の提出の時期、および単位認定試験前に増えるが、今のところそれほど大量ではない。単価が高いせいもある。

#### 4. 学習相談の状況

##### 学習相談

放送大学設置認可申請書のなかの学習指導方法に関する項において、“学習センターを各都県に設け、……面接授業を行うほか、学生に対するカウンセリング等を実施する”そして、学習センターの機能を整理した表の中に“学生の学修上の各種の相談に応ずること”となっている。

実際、学習センターには、60年4月の正式開所後はもちろん、その前年10月開設の仮事務所時代から、常時、電話、そして窓口膨大な数の相談が殺到した。一時ほどではないが、それは現在も続いている。こうした相談業務も広い意味では学習相談であろう。そして学習センターの機能として欠かすことができない。

しかし、こゝではそのような形の相談はそれとして、この初年度から全学的に、各学習センターで開始されることになった、つぎのふたつの学習相談を中心に述べる。すなわち、

- (1) 一般学習相談：各学習センターの専任教員が、学生の相談にあずかる。特別の日を除きいつでもとする。ただし、いわゆるオフィスアワー（2時間程度）を設けておく。当番教員の氏名を掲示し、希望学生に申し込ませる。
- (2) 専攻別学習相談：各学期の第4週と第10週の2週において、1日1専攻、



計6専攻，各専攻の教員が学生の相談にあずかる。当番教員はその学習センターの専任いかんにかゝらず，全学的に定める。

実際にこのふたつを第1学期に実施しはじめて，しばらくたって，これらとは別に，神奈川学習センターでは，つぎのようなもうひとつの学生との対話の機会を試みることにした。すなわち，

(3) フリートーキングの会：希望の学生を集め，原則として複数の教員，および事務職員もまじえた自由懇談会。

これは後述のように元来はそのつもりではなかったが，結果的には一種の学習相談のような役目も果たしたようなので，こゝでついでに述べることにする。

### 一般学習相談の実際

表2に実施の状況をまとめた。ほとんど毎日，待期をしていたが，思ったほどには相談を希望する学生は多くなかった。表3に相談の内容の例をいくつか秩序だてずに並べた。これらを多少無理はあるが分類すると表4のようになる。

表2. 一般学習相談の状況（神奈川学習センター，初年度のはじめの半年間）

集計期間 (初年度(昭和60年))	4月後半 ┆ 7月前半	8月初 ┆ 10月前半	約半年間 の合計
実際に学生が相談に きた日数	14日	6日	20日
相談にきた学生数	18人	6人	24人
そのうち予め申し 込みのあった人数	14人	5人	19人

(注) 電話や窓口での教務事務を主とする問合せ相談は含まない。相談票にもとづいて専任教員が面談した場合に限る

表 3. 一般学習相談での質問の例

●哲学の学習法と試験答案の書き方は？●学習の進め方について，科目を多くとりすぎて困っているが・・・●心理学の試験の記述のポイントは？●1学期の試験に全部失敗したけれど・・・●選科生に移行するについて履修の順序などについて・・・●1学期の経験をふまえて3学期の科目選択はどうしたらよいか？●面接授業に出席できなかったので，その科目のポイントがわからないから教えて下さい

●某々分野の研究をしたいが，どういう科目を勉強すればよいか？●“現代の経済と経済分析”の中のある図の曲線の説明，ある数式の意味内容について・・・●科目履修生で試験に落ちた時はどうすれば・・・●社会学を専攻したいのですが，今学期の単位のとり方はこれでよいか？●専攻を変更するには・・・●基本と基礎科目の区別について・・・●放送はどんどん画面が変わって追いつかないけれど・・・●英語の学習法は・・・●英語 I の会話にとっても追いつかないけれど・・・●短大卒者としてはどんな単位のとり方をすればよいですか？●某々科目を履修するのに必要な入門書を教えて下さい●単位認定試験の日程を教えてください●防衛大学校卒でも既習得単位を認めて・・・●面接授業の選び方について・・・●某々の分野を勉強したいが，現在の科目選択の仕方でもよいでしょうか？…………

表 4. 一般学習相談の内容

	4 月	5 月	6 月	計
1 授業内容について	7	5	2	14
2 履習方法について	6	4	3	13
3 次の募集や登録について	5	2	1	8
4 単位認定試験について	2	0	1	3
5 面接授業について	1	0	1	2
6 その他	3	0	0	3

(注) 表 2 と同じく相談票にもとづいて専任教員が面接を行った場合だけのデータである。

ある分野についての履習の要領や、科目の選択に関する相談がかなりあった。これらは関連分野の教員で何とかこなした。話が一般論的な段階のものが多かったからであろう。語学、とくに英語の履習方法についての相談は多かったが、教員としての常識の範囲で答えてあげられた。いずれも、もう少しつっこまれると困ったであろう。

個々の科目の内容で、かなり具体的な点についての質問もたまにはあった。ちょうどその科目分野の専門の助教授であったから支障なく応答が可能であった。しかしこの種の問題を学習相談で巧くこなせるのはむしろ偶然ではないか。

表3、表4だけを見ていると、学問的内容豊かな相談のような印象があるかも知れない。実際は、どうやら教務事務的な内容のものが多いためである。とくに第1学期の初期にはその傾向が強かった。もうひとつは、就学に関連しての悩みとか、経験話などを聞いてあげるようなこともかなりあったのである。

#### 専攻別学習相談の実際

表5に今までの計4回の実績を示す。各回とも、センター内の掲示板に来所する担当教員の氏名等を出したりして周知をはかったが、予約申し込みは予想ほどではなかった。でも相談に来た学生はそれぞれ本当に満足して帰ったことも事実であった。

第1学期の反省が教授会で行われた際、担当教員が、何か話題を提供するようなことを行ってみたらどうかという話がでた。これを第2学期の第4週目の回で試み、かつそれを当日、面接授業にきた学生達に“いささかのPR”（勧誘）を行ってみたところ、相当な人数を集めることができた。参集した学生は一緒になって担当教員の話を引き、ついで懇談形式での学習相談が行なわれた。学生達は“いささかのPR”に対する“いくらかのお義理”と好奇心もあわせ抱いて集ってきたようであったが、始まってみると、非常に喜んで、毎回予定の時間を大幅に越えて満足して終わったのである。

とくに普段はこの学習センターでは会えない先生方に直接、接触の機会がえられたことが嬉しかったらしい。懇談の内容は、とくにそれぞれの分野の話が中心にあったことは当然であるが、一般学習相談でもそうであったように、教

務事務的なものも多かったようである。

表 5. 専攻別学習相談の状況

(神奈川学習センター，初年度：1～2学期)

	第 1 学 期			第 2 学 期			合 計
	第4週	第10週	小 計	第4週	第10週	小 計	
待 期 日 数	6日	6日	12日	6日	6日	12日	24日
実 際 に 学 生 が き た 日 数	4日	4日	8日	6日	4日	10日	18日
実際に来た学生数	8人	5人	13人	53人	9人	62人	75人
(予め申し込みの あった人)	(6人)	(4人)	(10人)	(7人)	(2人)	(9人)	(19人)
1日平均の人数	2人	1.2人	1.6人	8.8人	2.2人	6.2人	4.2人

### フリートーキングの会の試み

学校が始ったばかりは、学校と学生とは、互いに相手が分らず、手探りの状態であった。4月の“入学生の集い”の会もあったが一方通行であった。前記の学習相談などで学生からの話を聞くことがあっても、それらはかなり個別的であった。また折角の学習相談といっても、前述のように教務事務的なことを含めて、いわゆるオリエンテーションに属するようなものがあった。学生は現実には何を期待し、考えているのであろうか。

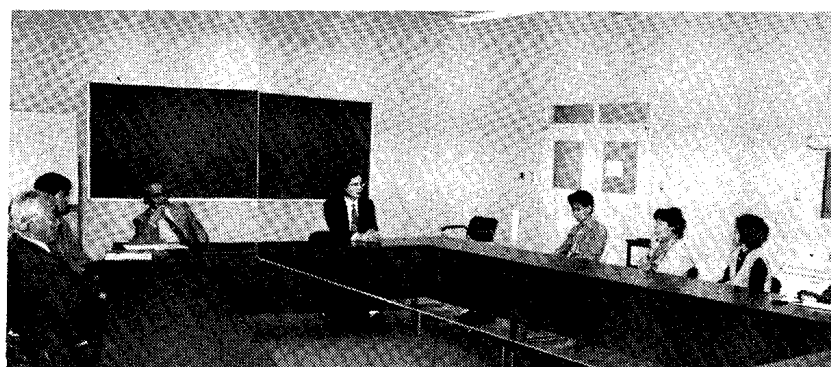


図7 フリートーキングの会

この会では面接授業担当の非常勤講師の方もオブザーバとして出席

ちょうどその頃、群馬学習センターで町田所長が発案、実施されたこのフリートーキングの会は、まことに格好のものと思われたので、早速に見習うことにした。

種々の学生群を対象としたいので、曜日を変えて、3回ずつ各学期に行った。掲示をしたほかに、面接授業を終わって出てくる学生に声をかけ“いささかのPR”で勧誘をして、まずまずの集りができた。“予めきまった話題はない、つまらないような話からどうぞ”と切り出したら、いろいろな話題がでてきた。他人の質問への答を聞いて満足したり、学校への注文に対して学生同志の話で納まりがついてしまったりした。そしていわゆる学習相談のかなりの部分が、これでより効果的に果せた面もでてきた。この会で出た学生の希望や気持の例を表7に示しておく。それぞれに答えてあげることで、学生の学校への理解が深まってよかったと思っている。

表6. フリートーキングの会の試み  
(神奈川学習センター, 昭和60年度)

実施月日 (曜日)	第 1 学 期			第 2 学 期		
	① 6 / 11 (火)	② 6 / 16 (日)	③ 6 / 22 (土)	① 9 / 10 (火)	② 10 / 13 (日)	③ 11 / 2 (土)
実施時間	70分	90分	95分	100分	100分	90分
参加学生数 (男性数)	22人 (9)	12人 (7)	21人 (9)	4人 (1)	10人 (2)	6人 (3)
合 計	51人 (男性25人)			20人 (男性6人)		
一回平均	17人 (男性50%)			7人 (男性30%)		

表7. フリーターキングの会での話の例

**学習全般**・生涯学習にしては忙しい・全科生の初めの10単位は多い・3学期制は忙しい・1学期1科目では継続性がかめない・  
 ・・・・**放送授業**・難しい科目があつてつらいが、レベルは下げないで・・・図面がすぐ消える（テレビの見方を工夫せよ）・  
 ・・・・**通信指導**・記述式をもっとやって下さい 締め切りを必着から消印にして欲しい・・・**単位認定試験**・択一式は問題数を多くして下さい・学期ごとに曜日、時間帯を変えて下さい・問題のプリントが欲しい・正解が知りたい・何故間違つたのか知りたい・・・**体育実技**・社会体育に頼るだけでは容易ではない・本学独自に実施するよう願います・・・**面接授業**・主婦層に週日の第1時限目の希望が多い・外国語科目は初、中、上級クラスを・・・80名クラスは多勢すぎる・定員以内ならばA、Bクラス間の移動を認めて・・・面接授業出席と認定試験時の有利、不利は？・非常によい、贅沢な勉強で嬉しい・実験面接授業を早く開いて欲しい（来年度には・・・）・コンピュータを使った実習がしたい・・・  
 ・・・・**再視聴**・**図書**・ヘッドホンを軽いものにして欲しい・画面が近か過ぎて疲れる・印刷教材にある参考図書を早く備えて下さい（もうすぐ・・・）・・・**学習センター全般**・学生が増えても今のサービスを続けてもらえますか？・学生相互、教員との交流の場をもっと・・・飲食コーナーでお茶が飲みたいのですが・・・学習センターに来ると意欲が湧いてくる・大学の本部の見学などをしたい・・・

### 半年の学習相談をふりかえって

具体的に学習相談とは何か、チュータリングとかカウンセリングとは何か、についての考えが、人によっていろいろのまゝ動き出したように思う。もう一度、この半年をふりかえってみると、学習相談の実際では、

- (1) 折角の準備に対して、学生の自発的な希望者は思ったほどには多くなかった。
- (2) 相談の内容：学問的内容に係るものもちろんあるが、同時に教務事務的

なものが多い。またときには“お話相手”を望む人もいる。

希望者が少ない理由はいくつか考えられる。まず、①わざわざ学習センターに行ってまで相談するのは大変だ。②先生に話を持ち込むにはそれなりの覚悟がいる。③申し込みを原則とするのは面倒だ。④まだ何を相談すべきか問題意識がない。⑤学生の大部分は“大人”である。相談なんか必要がない。<sup>\*</sup>……などである。

複数学生を集めての学習相談や、フリートークの会の試みは、一対一にありがちなバリエーションを低くし、共通的な学習上の話（教務事務的な話も含め）を、相互に気易く進める方法であったろう。

しかし、学生の学校に対する理解が進み、教務事務的な疑問も少なくなってくると、こうした形や内容の会の必要さも減ってこよう。学年進行とともにそのようになるだろう。そして学習相談なるものの内容が次第に変化してゆくだろう。学問的内容に強く係ることが残ってくるならば、それと面接授業との関係も改めて考え直さねばならなくなるだろう。したがって、何が学習相談の目的であるか、改めて問い直し、そのあり方を考えねばなるまい。しかし、当面は、あまり慌てた変更はさけ、既定の方式を中心にして効果を上げる工夫を続けながら、状況把握をすべきであろう。

## 5. おわりに

学習センターの機能のいくつかについて、神奈川学習センターのケース・スタディを行った。発足時期の短期間、したがって transient な状況であると考えるべきであろう。そこでこの報告では、後の判断材料になってほしいために、事実の記録を主にした。誤りや意見の混入がなければと思う。今後、学習

---

\* 若松教授（放送教育開発センター）はMME研究ノート（1983年11月号 p.9）において、米国コーストライン・コミュニティ・カレッジでの遠隔教育の状況を紹介している。その中でつぎのような記述がある。

“カレッジではいつでもチュートリアルのできる体制をとっているが、ピアノやペインティングを別として、とにかく学生が現われたいということである。学生の平均年齢が分別のある40才であるため、カウンセリングはあまり必要がないのではないかとも考えられている。

センターのこうした機能が大きな効果をあげるようになってほしい。ひとつの学習センターの担当者として、関係各位の御指導と御協力をお願いする。最後に本報告をまとめるに際し、多くのデータを準備し、ともに検討して下さった神奈川学習センターの教職員諸賢に謝意を表する。